

話題78 ティータイム(6) 口から食べるありがたさ

「誤嚥性肺炎」。高齢化社会を迎え、しばしばみられる病気である。食べ物が、誤って気管に入り肺炎を引き起こす。繰り返すことが多い。

食べ物を、口から食べる。飲む。ごくごく、当たり前前日常生活の食事の光景である。しかし、病気によっては、食べ物を飲み込むことが出来なくなってしまう病態がある。脳血管障害のように、突然やって来るともあれば、神経難病のように、緩やかな経過で訪れることもある。

「食べる」行為は、生活の「質」を担保する基本である。目で見て、「おいしそうだ」という感覚で唾液腺を刺激し、「甘い」「辛い」、噛んで味わって、飲み込む。ありがたい、一連の動作である。

胃瘻や経鼻経管栄養の場面を想定すると、その「有難さ」がよく分かる。無造作につるされた流動食のボトル、「食べたい」、「食べたくない」等の感情は入り込む余地が全く無い。計算されたカロリーと水分が流し込まれる。

問題は、頭脳の働きが正常に機能している際に、口から食べる事が出来なくなった際の判断である。食べ物を飲み込むことが出来なくなった、その「時」をもって、人生の終わりとするかどうかの判断が求められる。

老健施設において1年間に、経管栄養から経口食に移行できた高齢の患者さんを3人経験した。平均年齢は93歳。移行できた条件を探ってみた。

- 1、「食べたい」という意欲が基本にある。
- 2、弱いながら、飲み込む力が残されている。
- 3、ご家族が、誤嚥性肺炎の危険性を理解されている。

そして、経管栄養の期間が4か月以内であれば、成功率も高くなると結論した。

「食べる」ことは、幸福の最大の要因だと痛感した。

ティータイム

口から食べるありがたさ 石川 清司



「誤嚥性肺炎」高齡化社会を迎え、しばしはみられる病気である。食べ物が、誤って気管に入り肺炎を引き起こす。食べ物を、口から食べる、飲む、ごく、当たり前の日常生活の食事の光景である。しかし、病気によっては、食べ物を飲み込むことができなくなってしまう病態がある。脳血管障害のように突然やってくることもあれば、神経の病気のように、緩やかな経過で訪れることもある。

「食べる」行為は生活の「質」を担保する基本だ。目で見て「おいしそう」という感覚で唾液腺を刺激。「甘い。辛い。」かんで味わい飲み込む。ありがたい。食の一連の動作だ。

胃腸や経腸経管栄養の場面を想定すると「ありがとう」がよく分かる。無造作につるされた流動食のボトルには、「食べたい」「食べたくない」などの感情が入り込む余地は無い。計算された方ロリーが流し込まれるだけである。

問題は、頭脳の働きが正常に機能している際に、口から食べることができなくなった際の判断である。食べ物を飲み込むことができなくなったその「時」を、人生の終わりとするかどうかの判断が求められる。

1年間に、経管栄養から経口食に移行できた高齡の患者さんを3人経験した。平均年齢は93歳。移行できた条件を挙げてみた。「食べたい」という意欲が基本にある。弱いながら、飲み込む力が残されている。ご家族が、誤嚥性肺炎の危険性を理解されている。そして、経管栄養の期間が4カ月以内であれば、成功率も高くなると結論した。

「食べる」ことは幸福の最大要因だと教わった。(名護市、老健施設長、70歳)